

St. Luke's International University Repository

臨地実習場面を想定したシュミレーション学修: 初回訪室時の環境整備と観察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): Novice, clinical practicum, simulation training, environmental preparation, observation 作成者: 樋勝, 彩子, 佐居, 由美, 加藤木, 真史, 鈴木, 彩加, 縄, 秀志, 中溝, 倫子, Hikatsu, Ayako, Sakyo, Yumi, Katogi, Masashi, Suzuki, Ayaka, Nawa, Hideshi, Nakamizo, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00013657

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



臨地実習場面を想定したシミュレーション学修

—初回訪室時の環境整備と観察—

樋勝 彩子¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 加藤木真史¹⁾ 鈴木 彩加¹⁾ 縄 秀志¹⁾ 中溝 倫子¹⁾

Simulation Training for Clinical Practicum

—Environmental Preparations and Observations during the First Round—

Ayako HIKATSU¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Masashi KATO¹⁾
Ayaka SUZUKI¹⁾ Hideshi NAWA¹⁾ Rinko NAKAMIZO¹⁾

[Abstract]

Within the “basic nursing skills practical study” in the second year of nursing school, simulation training is completed using situations from learnt practices. This includes hospital room preparation and nursing skills, and observation of a patient’s physical state. This simulation training serves as preparation for practical training in an actual ward for novice students. Questionnaires were collected from students after their completion of practical training, and 90% found the training useful. Through participation in the simulation training, students felt that “they were able to gain a realistic image about practical training,” “they were able to communicate and prepare the environment within the ward,” and “it led to understanding the meaning behind the various practices by nurses.”

Simulation training before practical training led to an increase in observational skills during the practical training preparation period and in clinical settings. These newly developed skills may improve practical nursing skills. In future training, simulated situations should be as close to real life situations as possible. It is also important to provide a careful explanation of how skills acquired from simulation training can be applied to situations in practical training.

[Key words] Novice, clinical practicum, simulation training, environmental preparation, observation

[要 旨]

2年生の「基礎看護技術実習」では、病棟実習の準備として既習の看護技術をふまえたシミュレーション学修を実施している。特に初学者が実習で経験することの多い「初回訪問時の環境整備」や「患者の身体状態の観察」という看護技術をおこなう場面を設定した。学生に実習後におこなったアンケート調査では、9割の学生が実習に役立ったと回答した。具体的には、「シミュレーション学修を通して実習に対する具体的なイメージを持つことができた」、「病棟でのコミュニケーションや病室内の環境整備が実施できた」「看護師が実践していることの意図を理解することにつながった」という意見があった。

実習前に学内で実施したシミュレーション演習は、学生の実習準備と臨床での観察力を深め、看護実践力を高めることにつながっていた。今後の課題として、より実際の場面に近い状況設定を検討しつつ、演習での学びを実習の場でどのように活かすことができるのか学生に丁寧に説明していくことが必要である。

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science

【キーワード】 初学者、臨地実習、シミュレーション、環境整備、観察

I. はじめに

はじめて病棟での実習を行う学生の多くが、極端に緊張してしまい習得した知識や技術を活かせない、学内での演習内容と臨床応用とのギャップに戸惑いをみせることが報告されている¹⁾。聖路加国際大学（以下、本学）では上記のような学生の特徴に合わせて、学内での学びと臨床実践との乖離をできるだけ小さくして、学生が既習の内容を実習でも活用することができるように、実習の場面を想定したシミュレーション学修を2016年度より実施している。本稿ではこれまでの演習の実施状況と学生へのアンケート調査結果について報告する。

II. 科目の概要

演習は2年次後期の必修科目「基礎看護技術実習」の一部として開講している。科目の学習目標は「病棟実習を通して看護実践の場や看護師の活動に触れ、患者受け持ち実習で自分がどのように看護を展開していくかを具体化する」ことである。科目のスケジュールは、学内シミュレーション演習ののちに病棟における1日の看護師シャドーイング実習を行い、学内でのグループワークを通して上記の学習目標を達成できるよう構成している。

本科目の前提として、学生は2年次前期までに患者とのコミュニケーションや日常生活援助技術（環境整備、ベッドメイキング、体位変換、食事介助、清潔ケアなど）を学び、基礎看護技術について習得している状況である。また、患者の観察という点においては、ヘルスアセスメント技術を用いて対象者を観察する視点についての学習を終えている（表1）。

上記の既習科目の知識や技術が病棟実習において活かせるよう、演習の構成を検討した。

III. シミュレーション学修の具体的内容

1. シミュレーション学修の目標

演習の目標は「既習の科目の知識をふまえて、はじめて出会う患者に朝のあいさつを行い、対象者の身体状態

とベッド周囲の生活状況を観察し、本人の状況と生活環境を安全安楽に整える」とした。学生の到達目標は①実習と同様に初めて出会う患者に朝のあいさつができる、②対象者の身体状態とベッド周囲の生活環境の観察の視点がわかる、③対象者とそのベッド周りの環境整備の方法を理解し整えることができる、の3つとした。

2. シミュレーションの状況設定（図2）

シミュレーションをおこなう場面は「朝7時45分に、はじめて担当となる患者の部屋に訪問する場面」とした。この場面を選択した理由は、初学者がはじめての実習でおおむね毎回実践する「あいさつ」「環境整備」などの項目^{2) 3)}であること、前述したように既習の日常生活援助技術やヘルスアセスメント技術を取り入れやすいことである。さらに、実際の実習開始時間帯に状況を合わせることで、学生が臨床で同じような場面に遭遇した際に学内演習の内容を想起し、実習開始時の過度な緊張を緩和することができるのではないかと考えた。なお、患者の病状については、学生が紙上事例として学習したことのある疾患を用いて、不慣れな専門用語や器材の名称を使わないよう配慮した。

3. 実際のタイムスケジュール（図3）

シミュレーション学修のタイムスケジュールは図3のとおりである。はじめに演習の目標や学生の実施項目、場面の状況設定について説明をおこない、学生は4分間に①「患者への自己紹介」、②「患者の身体状態および生活環境の観察」、③「ベッド周囲の環境整備」という3点

表1 既習科目の内容

1年前期
【コミュニケーション実習】
内容：患者とのコミュニケーション
1年後期
【ヘルスアセスメント方法論】
内容：対象者の観察技術
2年前期
【基礎看護技術論Ⅰ】
内容：日常生活援助技術、診療における援助 （環境整備・ベッドメイキング・体位変換 ・食事介助・導尿・酸素療法など）

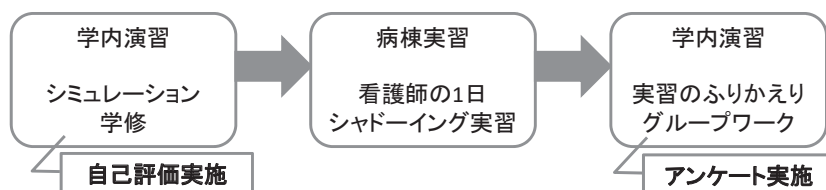


図1 本科目のスケジュール

鈴木さんは65歳の男性。

3年前に慢性心不全と診断を受け、食事療法と服薬を続けていた。1週間前から、安静時に息苦しさを感じるようになり、夜間も眠れなくなったため、病院を受診したところ慢性心不全の急性増悪の診断で入院となった。

入院後はベッド上安静となり、酸素投与、点滴が開始された。心電図モニターが装着され、排便時のみポータブルトイレ使用可となった。

入院翌日、あなたは鈴木さんの受け持ちとなった。

7:45看護学生としてはじめて鈴木さんの部屋に訪室する。

洗面は終了しており、朝食がこのあと8:00ごろ配膳される予定である。

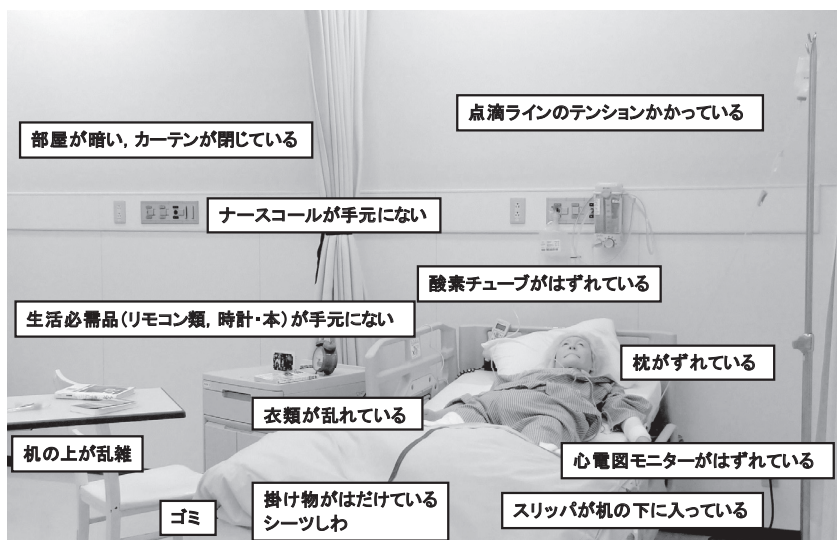


図2 患者の状況設定

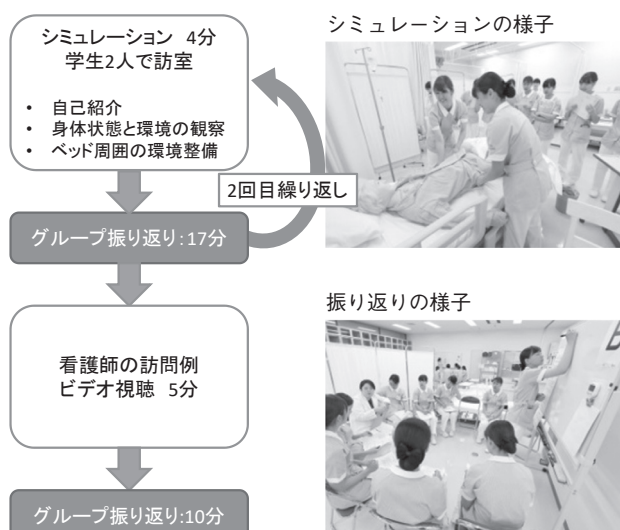


図3 タイムスケジュールと実際の状況

の課題について取り組む。その後、学生の実施状況の振り返り（何に気が付いたのか、実践をよりよくするためにはどのように改善すればよいか）をおこなった。振り返りの内容をふまえて、2回目の実施と振り返りを終えたあと、同場面に看護師が訪問した場合の動画を視聴し、自分たちの実践と比べて気付いたことを話し合うという流れとした。最後に、演習のまとめとして、はじめての病室訪問時のあいさつや対象者の状態の観察と環境整備のポイントを整理する時間を設けた。

4. 教員の役割

このシミュレーション学修における教員役割は、シミュレーション学修のスケジュールを学生に周知し、振り返りにおいて学生の話合いが効果的に進むよう発問をするファシリテーター役割、シミュレーション実施場面において学生の実施状況に合わせて患者役を演じる役割の

主に2つである。教員のファシリテーションは、学生が気づいたことを主体的に話し合えるよう、あらゆる気づきや疑問にも肯定的に関わり、教員の意見を押し通さないように努めた⁴⁾。また、患者役割を担う教員は、学生の行動にタイミングを合わせて発話するようにして、学生が自らコミュニケーションをとることを待つようにした。

Ⅳ. 学生の反応

1. 実施直後の学生の自己評価結果（表2）

演習終了時に行った自己評価の結果を示す。演習をとおして、患者へのあいさつや環境整備については自信をもってできると回答していた学生が8割以上を占めていた。しかし、点滴やドレーンなどの挿入物について確認することやヘルスアセスメント技術を用いて患者の状態を観察することについてはまだ自信がないと回答した学生が半数程度みられた。これは患者の安全・安楽な環境整備という視点は日頃の技術演習や自己学習の際にも教員から助言を受けて繰り返し実施しているため、知識と技術を身につけていることが要因と考えられる。一方、点滴やドレーンなどの扱いや患者の身体状態観察の視点は知識も不十分で不慣れであり、まだ自分で実施するには自信がないと学生は感じていたと考える。

上記の結果から、実習において学生が不慣れな器材や診療用具にふれることがあった場合には、教員や臨床指導者から説明を補う必要があると考えられた。また、対象者の身体状態の観察について基本的な知識はあっても、患者の症状や疾患から導き出される個別的な観察項目をその場で考えて実践することは2年次の段階では困難であることがわかった。

表2 演習直後の学生自己評価の結果

【実習でもできそうだと感じた点】 ・大きくはっきりとした声で挨拶をする ・患者に自己紹介を行う ・部屋の照明の調節を行う ・部屋の換気が必要か確認する ・シーツにしわや汚れがないか観察する ・テーブル上の物品が整理されているか確認する ・衣類や掛け物の乱れを整える ・患者は安全か確認する (床の水分, ベッドの高さ, 柵, ナースコール) ・痛いところや苦痛はないか確認する
【実習で行うにはまだ自信がない点】 ・装着物・挿入物の確認ができる (酸素, 点滴, 尿カテーテル, 心電図モニター) ・病者の身体状態の観察を行う

2. 実習後アンケート結果 (表3, 表4)

病棟実習を終えて学内でのグループワークを行った際に、「病棟実習前の学内シミュレーションは実習に役立ったか」というアンケート調査を実施した。調査は科目の改善を目的に実施し、参加は任意であること、匿名化されて結果は公表される旨をアンケートの前に説明した。アンケート回収率は97%であった。

アンケートの結果は表3, 4の通りである。全体の約9割の学生がシミュレーション演習が実習に役に立たと回答していた(82人中74人)。具体的な理由として、“実際の病室に入るとこんなに緊張するものなんだと、実習への心の準備ができた”“自分の声が大きいか小さいのが演習でよくわかった”“一度学校で練習して皆でその反省点を振り返ることで自信を持って落ち着いて行動できるようになった”など【実習を具体的にイメージすることができた】ことや【実習準備に役立てられた】という意見があった。また、“これまで受けてきた授業で断片的に知っていたケアを、実際に病室で活用するとはこういうことなんだという納得感を得た”“学校で学習した換気や温度、日光の調節などを実際の臨床ではどのように行っているのか違いを比較できた”“自分が今までの知識をアウトプットできるのかを気づかせてくれたよい機会だった”といった【学習内容を臨床でどのように体現するのか考えられた】という意見もみられていた。

また、“演習をしたために、患者さんへの自己紹介がスムーズにできた”“病棟に行き、看護師に話し掛けてからすっと言葉が出た”というように、【患者・看護師とのコミュニケーションに役立った】という意見や、“病室内を動く際、何に気をつけなければならないのか(ライン類や私物など)注意することができた”“実習で自然と床に落ちているゴミを拾ったり、オーバーテーブルの時計を見えやすい位置に動かしたりすることができた”“布団が足先までかかっているかなとかスリッパが散らかっているかなとか実際の実習でも気を配ることができた”“この

表3 学生の感想(実習に役立った点)

【実習を具体的にイメージすることができた】 ・病室に入るとこんなに緊張するものなんだ
【実習準備に役立てられた】 ・自分の声が大きいか小さいのかよくわかった ・一度学校で練習して皆でその反省点を振り返ることで自信を持って落ち着いて行動できるようになった
【学習内容をどのように体現するのか考えられた】 ・これまで受けてきた授業で断片的に知っていたケアを、実際に病室で活用するとはこういうことなんだという納得感を得た ・学校で学習した換気や温度、日光の調節などを実際の臨床ではどのように行っているのか考えられた ・自分が今までの知識をアウトプットできるのかを気づかせてくれたよい機会だった
【患者・看護師とのコミュニケーションに役立った】 ・患者さんへの自己紹介がスムーズにできた ・病棟に行き、看護師に話し掛けてからすっと言葉が出た
【病室の環境整備を実践するための技術が向上した】 ・病室内を動く際、何に気をつけなければならないのか(ライン類や私物など)注意することができた ・実習で自然と床に落ちているゴミを拾ったり、オーバーテーブルの時計を見えやすい位置に動かしたりすることができた ・布団が足先までかかっているかなとかスリッパが散らかっているかなとか実習でも気を配ることができた ・この人にとって手が届く場所に置くべきものは何であるのかを聞くことができた
【看護師の実践の意図を理解することにつながった】 ・配膳の前の食事の環境を整えることや、時計が見えるようにテーブルに置くなど、ナースが行っていることについての気づきが得られた ・看護師が実際にシミュレーションで学んだ環境整備を行っていたので、なぜこの行動をしたのか意味がわかることが多かった

人にとって手が届く場所に置くべきものは何であるのかを聞くことができた”などの【病室内の環境整備を実践するための技術が向上した】という意見もみられた。

さらに、“看護師が観察している内容をあらかじめ理解していたので、それを考慮して実際の現場で見ることができた”“配膳の前の食事の環境を整えることや、時計が見えるようにテーブルに置くなど、ナースが行っていることについての気づきが得られた”“看護師が実際にシミュレーションで学んだ環境整備を行っていたので、なぜこの行動をしたのか意味がわかることが多かった”というように、【看護師の実践の意図を理解することにつながった】という意見もみられていた。

一方で、シミュレーションが役に立たなかったという意見も見られ“患者自身や家族が環境整備を行なっていることが多かった”“学校と病室は違うし、演習の通りに初回訪問の時間があるわけでもなかった”“患者と演習の時ほど喋る機会がなかった”“あまり練習したことを実際にできなかった”“実際は演習のときほどそんなに散

表4 学生の感想（実習に役立たなかった点）

【実践する機会がない】
・ 同じような場面に遭遇することはなかった
・ 患者自身や家族が環境整備を行っていた
・ 患者と演習の時ほど喋る機会がなかった
【実際の状況とは異なっていた】
・ 演習のときほどそんなに散らかっていなかった

らかっていないので実際の病室にありそうな演出にして、いかに気づけるかを練習した方がいい”という意見があった。学内演習と臨床場面の違いがあることで戸惑い、学びを活かすことができない学生もみられており、過度な演出をせずに実際の場面により近い状況設定を検討することや、学修した内容がどのように実習でいかされるのか丁寧の説明をおこなうことが重要である。

V. まとめ

実習前に学内で実施したシミュレーション演習は、学生の実習前準備となり、臨床での観察力を深め、看護実践力を高めることにつながっていた。学内での学びと実習で出会う場面には違いや多様性があり、経験をするなかでどのように学びを活かすことができるのか、学生に

丁寧の説明していくことが必要である。

謝 辞

本科目にご協力くださった皆様に心から御礼申し上げます。特に本科目の構成やシミュレーション演習の内容についてご指導いただきました菱沼典子先生、初期からお力添えいただいた大橋久美子先生に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 佐居由美, 石本亜希子, 伊東美奈子ほか. 看護学導入期の学生の困難性に対応した Web 教材の開発. 聖路加看護学会誌. 2011; 15(1): 17-25.
- 2) 佐々木真紀子, 石井範子, 長谷部真木子. 臨地実習における看護技術の教育上の課題—「環境整備」の学習状況の分析から—. 秋田大学医学部保健学科紀要. 2003; 11(1): 68-74.
- 3) 吾妻知美, 前川幸子, 重松豊美ほか. 基礎看護学実習において学生が経験した看護技術の現状—「基礎看護記録経験録」の分析から—. 甲南女子大学研究紀要. 2010; 4: 105-113.
- 4) 阿部幸恵. 臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育：医学書院；2013. p. 109-115.